

# キャリア教育における実践と課題 PartⅦ

## ～障害の重い児童生徒のキャリア発達支援について考える～

企画者	達 直美 (東京都立光明学園)
	松本 和久 (岐阜聖徳学園大学)
司会者	達 直美 (東京都立光明学園)
話題提供者	加嶋 みずほ (東京都立高島特別支援学校)
	石井 幸仁 (三重県立杉の子特別支援学校)
	今野 由紀子 (宮城県立迫支援学校)
指定討論者	菊地 一文 (植草学園大学)

KEY WORDS: 障害の重い児童生徒 キャリア発達支援 特別支援教育

### 【企画趣旨】

本シンポジウムでは、子供たちの自立と社会参加に向け、一人一人のキャリア発達をどのように支援するのか授業実践を通して検討してきた。今回は、課題の一つであった障害が重いと言われる児童生徒（以下、障害の重い児童生徒）のキャリア発達をテーマにして、発達や行動面に様々な課題を抱え、生活経験が少ない子供たちの思いや願いをどのように引き出し、そのらしい生き方をどのように支えていくか考えた。そして、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していく過程をどのように捉えるのか、本人の思いや願いから将来像をイメージしてどんな力が必要なのかといった2つの視点から、障害の重い児童生徒のキャリア発達支援の在り方について協議した。

その結果、子供自身の伝えたいという意欲、夢や希望の一つの方向性として妥当な指導内容から「今」の充実につながる、初めは受け身的ながらも学習の意義を子供自身が実感することの大切さを確認できた。一方で、障害の重い児童生徒に対して「できること」や「できないこと」に着目しがちな支える側の課題も指摘された。

この指摘を踏まえ、本シンポジウムでは子供たちの「しようとする姿勢」に着目し、「できるかもしれない」という長期的な視点を大切にするとともに、教育活動の幅を広げ、一人一人の可能性を引き出すために何ができるのか考えながら、障害の重い児童生徒のキャリア発達支援の意義と具体的な方策について協議したい。

### 【話題提供者の趣旨】

1 「詳細なアセスメントに基づく、自ら活動する姿勢や言語等の表出を促すアプローチからキャリア発達を考える」(加嶋)

知的障害特別支援学校では、児童生徒の障害の状態について、様々なアセスメントにより把握するとともに、その実態を踏まえて授業の目標を設定したり指導内容や方法を選択したりする。ここでは、小学部に在籍する児童の自発的な活動を引き出すために、「発語」「対人関係」「手の運動」の側面からのアプローチを取り入れた授業の実践の中で、「様々なものを手掛かりとして活動に見通しをもち進んで活動しようとする姿」を引き出すこと、活動を通して言語活動を活発に行うことで「理解言語」「発語・サインの表出」を増やしていくことを目指した取組について話題提供し、障害の重い児童生徒のキャリア発達について考えたい。

2 「運動機能や感覚機能へのアプローチからキャリア発達を考える」(石井)

障害の重い児童生徒は、運動発達が遅れている子が多い。そのため、イメージ通りに体を動かせなかったり、手先の

作業が苦手だったりする。また、ある感覚が鈍麻だったり、過敏だったりする子供が多い。そのため、活動が制限され、経験不足になりやすい。運動機能や感覚機能にアプローチすることは全発達を促進するだけでなく、生きやすさにつながり、将来の豊かな暮らしや働く姿にもつながっていくと考える。ここでは、知的障害特別支援学校小学部の運動機能や感覚機能の向上を目指した授業実践の中で、コミュニケーションや社会性のアプローチも含んだ取組について話題提供し、障害の重い児童生徒のキャリア発達について考えたい。

3 「意思表出へのアプローチからキャリア発達を考える」(今野)

知的障害と肢体不自由を併せ有する中学部生徒の事例を報告する。対象生徒は歩行や意思表出に困難さを抱えるが、この生徒に思いと力があることを信じ、教師と保護者で少し先の将来像を描き、年間の目標を立てて支援に取り組んだ。摂食や身体へのアプローチも含めて保護者や外部専門家と連携した取組について話題提供したい。生徒の思いを汲み取り、選択・経験の機会を大切にしたら結果、対象生徒は伝わり分かり合える喜びに気付く、意思表出への意欲の向上につながった。また、自分が分かって取り組むこと、役割を果たそうとする意識、内面的変化といった生徒の役割とキャリア発達についても検討したい。

### 【指定討論者の趣旨】

「キャリア発達の見取りと妥当性」(菊地)

キャリア発達は、障害の有無や状態にかかわらず、全ての生きる者が有するものである。とりわけ学校教育段階での支援が特に重要となるが、学校教育のみならず、多様な場及びライフステージで捉え、つないでいく必要がある。

特別支援教育は、特殊教育の時代から「教育の原点」と言われてきた。このことは、どのような状態におかれている子供であっても、一人一人の成長の可能性を信じ、日々の実践を目標・内容・方法レベルで検討し、創意工夫のもと切り拓かれてきた教育であるためと捉えられる。まさに特別支援教育は、キャリア発達支援に努めてきた教育であると言える。

討論では、各話題提供者が着目した子供の「言語活動」「運動機能」及び「感覚機能」「意思表出」等の具体的な変化について、その背景にある本人の「思い」と併せて把握し、理解に努めていくことで、キャリア発達の「見取り」の妥当性を高める方策について検討したい。

(TSUJI Naomi, MATSUMOTO Kazuhisa, KASHIMA Mizuho, ISHII Yukihito, KONNO Yukiko, KIKUCHI Kazufumi)